

第25回「東書教育賞」の審査を終えて



審査委員長

寺崎昌男先生

受賞された先生方、それから関係者の方々に心からお祝いを申し上げます。この東書教育賞も、第1回では、160編の応募がございましたが、次第に増えまして毎回応募数が伸びてまいりました。今年は、251編の応募をいただいております。このように全体として増加してきたということは、東書教育賞そのものと、小中学校全校に配布している、『入選論文集』が浸透してきたのだと思います。先生方が教育実践に活用してくださっている、その結果ではないかと考えて、たいへん感慨深いものがございます。

なお、平成6年度に、教育用コンピュータソフト活用というB部門を設けました。ところが、それ以後の期間にコンピュータの活用が各教科の中で行われるよう浸透してまいりました。それで今回は、B部門を発展的に解消いたしました。ICTに関する論文については、後ほど坂元先生からご講評がありますが、統合して審査させていただくことになったわけです。

さて、今回の課題は、先生方がご承知のように「生き生きと学び健全な子どもを育てる教育実践」となっております。学力の問題は、実は到達度の問題ではなく学習意欲のところにあります。学習意欲の問題です。子どもたちが生き生きと学び健全に育つということがするために、教師に何ができるか。それが問われていまして、私どものテーマもそれを真正面から問うていくということにさせていただきました。

もう一つ、審査の基準としてこれまでもずっと重視してきましたのは、次の3点でございます。一つは実践性という観点です。実践の結果に基づき具体的に記述されているかどうか、さらに論じられているか。これは当然のことだとお考えになるかもしれませんが、中にはこれを感じ取れない論文も結構あります。単に理論や概念が述べられている、それに大半の紙数を費やしている論文。それから、そこに表れている言葉は、今までどこかで見たような言葉ばかりが並んでいる論文も、中にはございます。私もはそういうものを避けて論文の中に先生方と子どもたちとの関わり、その姿、子どもたちの変容や成長が具体的に記述されているかどうか。これを毎年、非常に重要なポイントとして審議してきました。

第2番目のポイントは創意工夫という観点です。子どもたちが生き生きと学び取ることができるために、どういう独自の工夫が示されているかということです。

第3番目は一般性があるということです。一般性があるかどうかということは、特別な実践ではない、だれにでも応用できるかどうかということを見ます。それから、子どもの発達段階、適時性に十分な配慮がなされているかどうか。あまりに特別な条件のもとでしかできない実践は、評価できないと考えています。

私どもは常にこの3点を意識してきました。

しかし、これは口で言うほどやさしいことでは
ございません。特に創意性と一般性というこの
二つは、ときには矛盾します。創意性があるか
らこそ一般性が低いということは常に起こり得
ることです。この点は毎回、審査会で議論にな
ります。議論を重ねながら、最終的に先生方の
論文を評価させていただいたということになり
ます。

そのほか、たとえば論文としての体裁がきち
んと取れているか、テーマと内容が一致してい
るか、理解しやすく表現されているか、これま
での発表の状況や字数の制限ということにはも
ちろん留意し、東京教育研究所の先生方のご審
査を踏まえて、私どもは審査をいたしました。

では、具体的な論文について申し上げます。
小学校では172編の応募がございました。この
中から最優秀賞1編、優秀賞3編、特別賞1編、
奨励賞3編、合計8編を選定させていただきました。

最優秀賞には愛知県安城市立志貴小学校、岩
月佐江子先生の「過去の三河地震の教訓から防
災を学ぶ地域密着の総合的な学習」が選ばれま
した。この論文は総合的な学習のテーマに「防
災学習」というテーマを大胆に取り入れられた
ものです。東海地震への備え、被災時の行動等
に自信がもてるようになる実践を、計画的に積
み上げられたものです。仮説、研究計画、学習
内容などが統一的に把握されていることがわか
ります。

また、子どもたちは発展的に生き生きと学習
していきまして、地震への対応についてその見方
や考え方を深めているという点で学習過程の良
さがあり、しかも、ともに意見を出し合い学習
を深めています。一つのことを探求した経験が
授業中の表現、学芸会での演出という活動にあ
ふれていきまして、これは全員一致で最優秀賞に
取り上げさせていただきました。

優秀賞の一つは熊本県玉名市立有明中学校、
井上裕一先生の「追究意欲を高める社会科教材
の開発と学習活動の工夫」を選ばせていただき

ました。井上先生は、昨年に続いて優秀賞を受
賞されました。地域教材を開発されたことや、
新学習指導要領の趣旨に添った学習展開、また、
定置網漁とアジの一本釣りを対比させた導入部
分は、非常に見事だと思いました。教師が子ど
もたちの学習の進め方に、積極的に関わってい
るという点も評価できた部分でございます。

もう一つの優秀賞は埼玉県所沢市立北秋津小
学校、河角哲也先生の「ICT活用による算数科
の指導の工夫」が選ばれました。デジカメの簡
単な活用に励まれる一方、ノートを共有化させ
る、教科データの実習をする、ICTを活用した
非常にシンプルな方法で、大幅に授業を改善さ
れ、テスト結果においてもその効果が示されて
いきまして、非常に綿密な優れた論文でござい
ました。

また、福島県石川町立南山形小学校、塩田正
信校長先生の論文は、「心づくり、知恵づくり、
体づくりを目指した教育活動の創造」という題
の実践論文で、山間地の非常に小規模な学校で、
教師が子どもたちとじっくり取り組んだ様子が
非常によく分かる実践です。計画は綿密で、特
にこの中で「30のストラテジー」というものを
校長先生は主張されていきまして、独創的できわ
めて具体性に富んだ、優れた論文でございま
した。

次に、特別賞ですが、これは第20回を記念し
て設けられた賞でございます。今回の特別賞に
は、東京都江戸川区立二之江小学校、小林省三
校長先生の「知的障害児に国際コミュニケーション
力を育む英語活動の実践」という論文が
選ばれました。知的障害児の特別支援学級で、
英語活動の実践を通して国際コミュニケーション
の素地を育てようという実践と、その考察で
す。そして、英語活動の効果的な指導のあり方
にも言及され、非常に優れた論文だと思いま
した。小林先生はこれから始まる英語教育の課題
を、知的障害児の教育、特別支援教育というも
のにつなぐという、非常にまれな実践に挑んで
いらっしゃる事が特別賞の大きな理由でござ

います。

次に、中学校に関して申し上げます。中学校は79編の応募がございました。その中から、最優秀賞1編、優秀賞2編、特別賞1編、奨励賞5編、計9編を選定させていただきました。最優秀賞には静岡県浜松市立庄内中学校、石原貴志先生の「意欲的に取り組む生徒を育成する天体学習」が選ばれました。この論文では透明半球を使った太陽の動きの観察方法を工夫され、子どもたちが多くの発見をできるようにされたものです。いろいろな天体模型を考案されて、本物の天体の動きに似せてイメージをもてるよう工夫されています。よい素材を見つけ、分かりやすい模型を作り、イメージするということが行われているだけではなく、実際の観測のように観察させるという授業展開で、生徒一人一人が意欲的に取り組んでいる様子が、手に取るように伝わってくる優れた論文でございました。

優秀賞の一つには大阪教育大学附属池田中学校、上原昭三先生の「『活用力』を育てる課題学習の実践～紙を折って作図をしよう」という実践論文が選ばれました。活用力を育てる視点として、数学的な情報を取り出しやすくし、数学的な解釈が比較的容易であるということ、次に、解決方法が多様であり、直線的ではない、3番目に、解決に必要な先行経験が多岐にわたる、この3点を重視して取り組まれた論文です。教師の意図と生徒の反応が、それぞれきちんと整理されており、優れた論文だと思います。

もう一つの優秀賞には、広島県府中町立府中緑ヶ丘中学校、迫田豊校長先生の「公立中学校の改革『軌を一にして』」という実践が選ばれました。問題行動が多発する低学力の学校で、迫田校長先生は、「生徒指導より学力向上を優先しよう」と先生方におっしゃり、この難題をわずか1年で見事に解決し、生徒は劇的に変化したと報告されています。当たり前のことを、徹底して実践することの大切さを教えてくれる論文だということで、私どもの意見は一致しま

した。

特別賞には同じように広島県尾道市立原田中学校、木村好江校長先生の「豊かな体験活動を通して育成するキャリア能力」が選ばれました。キャリアを選ぶ力を育てるということは、今後ますます重要なテーマになっていくと思います。木村校長先生は「夢を志に」というキャッチフレーズのもとに全教職員、保護者、地域が一丸となって教育活動に精力的に取り組むというシステムを創られました。生徒の変容の様子も非常によく分かり、その能力が体験によって身につくと、キャリアを選ぶ力が身につくことも実証された優れた論文でございました。

最後に、私個人の感想を申し上げますと、まず申し上げなければいけないのは先生方への敬意でございます。ここで文章として表現された事柄の背後には、実は書かれたことの何倍にも上る、きめ細かな教育実践があるわけです。実践事実に対して、まず心からの敬意を表したいと思っております。

私の専門は近代日本教育史です。その歴史の中で見ますと、特に日本の教師の歴史の流れを見ますと、ものを書く、しかも自分が子どもたちに対して何を指導したかを書き記すという流れは、実は非常に古くから始まった、日本の独特の貴重な遺産だと考えられます。それが始まったのはいつからか。私の見るところ、教育雑誌が山のように出始めた明治30年前後です。このときに教師向けの雑誌が続々と現れてまいりました。それには、授業記録がきわめて具体的に載っていきまして、これがどうも最初ではないかと思います。

大正時代になりますと、新教育が普及してきます。大正自由教育といわれる新教育が普及すると、子どもたちに新しい活動を行った記録がまた作られていきました。昨年も申しましたが、そのJR王子駅の裏側に飛鳥山ががございます。そこは桜の名所で、東京では有名な遠足場所です。飛鳥山に子どもたちを連れていくことを記録した、樋口勘次郎という人が書いた「飛

鳥山遠足」の記録は、日本における子どもたちの指導記録でもっとも古典的なものの一つです。歴史のうえでは、そこから大正の新教育が始まったと言われています。

昭和になりますと、ご承知のように山びこ学校をはじめとして、たくさんの実践記録が生まれました。

しかし、60年代に入ったころから、次第に記録を書くという風潮は薄れていったのですが、先生方が子どもたちとのつながりを書き残す動きはしっかりと残っていき、先生方が教育

実践を記録にして書かれるというのは、一種の日本独自の教員文化といってもよいのではないかと。おそらく外国には、このような風習がないのではないかと思います。これは、きわめて大事にすべきものだと思います。

書くことによる実践の反省が、「書く」という作業の中に含まれているということをあらためて感じますと、そうした活動の一環として東書教育賞が位置づいていることはたいへんうれしく、また誇りに思う次第でございます。おめでとうございました。



受賞者の先生方、本当におめでとうございます。私のほうではICTに関わる論文の審査を担当しましたので、そのご報告を申し上げたいと存じます。寺崎先生がおっしゃった全体の評価の基準に加えて、ICTのほうではICTを上手に活用している方、ICTによって教科指導、生活指導、学校経営などが改善され向上している方、そこに広がる可能性というような観点から審査させていただいております。

その中で先ほどお話いただいたように、ICTに関わる論文として埼玉県所沢市立北秋津小学校、河角哲也先生の「ICT活用による算数科の指導の工夫」が優秀賞を受賞されました。おめでとうございます。

寺崎先生が内容について簡単にご紹介くださいましたが、系統的な算数のような指導では、前に何を学習したかわからずにつまずくという子どもがたくさんいます。それで、授業に入る前の5分間で、今までの関連する単元でどんな勉強をしたかということが子どもたちに示されれば、ものすごく理解しやすいだろうということがあるわけです。

この点でICTを使って、この単元の初めから使ったグラフや絵を中心に5分ぐらいで、1時間目、2時間目、3時間目、本時と、それまでの学習をさっと復習して次の授業に入るということは、たいへん効果があることを示されています。これは特色の一つです。

このときにパワーポイントの動画機能、アニメ機能だと思いますが、計算なら計算の手順とか、グラフの動きとか、教科書の絵などを使って、非常にわかりやすく、子どもたちに理解しやすくされています。

4年生88名で、授業の頭で単元の振り返りを入れたいくつかの単元と、取り入れないいくつかの単元を比較研究すると、100点を取った人は取り入れたほうで53.4%、取り入れなかったほうで34.8%だったという効果測定もきちんとされているということで、これはICTがいかに効果的であるかを実証しています。

もう一つ、ノートの共有化ということで、デジカメ小黒板と呼ばれていたと思いますが、先生が子どものノートをデジカメで撮って、デジカメでパッと見せれば、たいへん効果が上がるというもので、ICTを効果的に使用されていることが評価され、優秀賞の受賞となりました。

多少お時間をいただいて、これは恒例になっているのですが、ICTに関する世界の様子について、今年もお話しさせていただきたいと存じます。

いろいろな国にこの1年間まいりましたが、今日はアメリカ、イギリス、韓国に絞ってお話し申し上げたいと思います。1年前にアメリカではオバマ新政権が誕生したわけですが、その教育政策には大きく五つの柱があるということです。すでに存じと思います。

1番目は早期教育です。2番目は大学・職業準備の学力や評価、3番目は有能な教員の育成、4番目にチャータースクールの拡大とか、日本と似たようなことですけれども学習時間の延長とか、低学力校の再転換による革新と優秀さ(excellence)の促進、5番目は、高等教育の資格免許を取る人数を増やすということです。五つのうちの一つに、初等中等教育の充実ということが入っています。

アメリカでは、ご存じのようにNETS-Aという管理職の先生がもつべき能力基準が去年改定されました。五つあるので、紹介させていただ

きます。先見性のある指導力、これが1番目、2番目はデジタル時代の学習文化の理解力、3番目は優れた専門実践力、4番目は体系的な改善、5番目はデジタル市民性、こういう管理職が望ましいのだという細かいアイテムがありますが、これらを打ち出すようにがんばってきております。それが現状でございます。

イギリスのほうは、ブラウン内閣になって省庁改編が起こってしまっていて、文部技能省は「学校・子ども・家庭省」と「研究・大学・技能省」に、省の名前を変えて、学校教育の重視から、家庭と子どもを重視するというような傾向がございます。

ICT関係で言いますと、学校教育でのインフラ環境やその活用に力を入れています。個人に目の届いた指導をしましょうということをお願いしており、去年の後半から、個人個人の間の協調を重要視するようになってきています。

それがこの省の「家庭への重視」ということになって、家庭に向けて学校教育を広げていくとか、広報していくという姿勢を強く打ち出してきました。この秋、中学校から中学生全部の家庭へ学校情報をネットワークで提供することを計画し、ほとんど実践されているわけです。そのようになってきて学校と家庭との連携、学校の活動を家庭に知らせて家庭の保護者が常に学校を見られるような状況をつくっているわけです。

実際にイギリスでインターネットはどうかというと、小中学校全校にインターネットが入っていて、90%の先生がオンライン教材にアクセスできる。88%の先生が、自分の体験からICTは学力向上に役立つということを感じている。80%の学校が、家庭向けのWebサイトを持っている、というようなデータが出ています。

小学校ではパソコン1台あたり6人。80%の先生がe-黒板(インタラクティブ・ホワイトボード)を毎日、使っている。中学校ではパソコン1台あたり3人の生徒。73%の先生が毎日、

e-黒板を使っているということです。

ロンドンの北の方にエセックスという地域がございますが、そこではオンライン教材を公的資金でメーカーさんに作ってもらい、それを学校が無料で使えるというサービスが提供されています。

また、裕福なエリアの小学校でしたが、一人1台のパソコンを机の上に持っていて、各教室に1台ずつe-黒板があって、小学校にK（幼稚園）クラスがあるわけですが、Kクラスから6年生まで、先生も子どもも自由にe-黒板、パソコンを活用していました。言葉の学習、文章を作るとか、絵を作るとか、時計を読むとか、歴史を調べるとか、プレゼンに使うとか、本当に当たり前パソコンを使っている様子が見られました。

もう一つの学校は、日本の成果である任天堂のゲームを二人に1台持たせ、ゲームを通して教育をするという、日本ではちょっと考えにくいようなことが行われていました。犬のゲームのようなものがありますと、歴史では犬の飼育の歴史を勉強する。算数では、ペットの売買ゲームのようなものをする。理科では犬の世話をする。犬の歯磨きをどうするか。それから美術では犬の絵を描く。図工では折り紙犬を作る。音楽では、犬の歌や動きのまねをする。ICTでは、ブログで犬の写真を出す。英語では、犬の日記を書く。このように、全教科で一つのことに絡めた教育指導をやっているということです。

また、学校教育というか教育に、ゲームは役に立つという考え方から、CIIAというあるインタラクティブ・ソフトウェアの団体などでは、ゲームを教育に利用するときの導入の仕方や作り方など、ゲームを教育利用するときの前日からの準備とか、一度練習してから子どもにやらせるとか、いろいろな細かいガイドラインを作って、ゲームの学校教育への有効利用というものが見られています。

ヨーロッパでは、学校教育でよくゲームが利用されています。いちばん使っているのはス

コットランドあたりで、いわゆる学習ゲームだけではなく、普通のゲームも学校教育の中でよく使われています。

さて、そこで韓国は、昨年少しお話ししたようにデジタル・テキストブックの研究が進んでおり、去年20校だったのが今年は112校になって、これを韓国全体に広げようということになったようです。小学校の主要4科目は国定教科書ですから電子化がしやすいわけです。電子教科書にした実験校に行きました。実験クラスでは紙の教科書を持っていない。紙の教科書は家に置いてあって、家でお父さん、お母さんが見るし、自分が帰ったときに見る。学校では全部デジタルな教科書で勉強していました。

教材提示としては、マルチメディア、図、絵、動画、ビデオクリップ、アニメ、3Dなどが提供できる。データ検索として、文献とか、リンクができるし、ライブラリー機能を持っているとか、学習管理として、いろいろな成績の評価とか、成績に関するデータの作成や、MMSという学習を管理するシステムを動かすとか、双方向のコミュニケーションができるなど、いろいろな機能を踏まえてデジタル教科書という呼び方をしているわけです。

具体的に言いますと、例えば教科学習ですと6教科があって、子どもたちは学習前に予習できるし、復習もできる。授業中にも、もちろん使える。評価にもそのシステムを使う。宿題にも使うということで、ネットワークは学校だけではなく家庭や教育機関、教育機関の中では科学館、図書館、病院、教育委員会、マスメディアなど、いろいろなところとつながっていて、そこから情報をもらって子どもたちが勉強できるようになっている。EDUNETという全国のエデュケーションシステムを使って行っているわけです。

そういう全国のネットワークはNEIS (National Educational Information System) といいますが、校務・教務の情報サービスネットワークです。800万人の小学校、中学校、高校生のデータが入っています。行政面では先生方に関しては人

事、履歴、昇任、転任、給料の情報、それから市民サービスとしては、オンラインで資料を提供したり発行したり、あるいは公示したりする。保護者に対しては学校のカリキュラム、子どもの成績、予算、ボランティアに関する情報など。これらはいま170万人の保護者が使っているということです。

このようにICTは広く世界で使われているのですが、日本ではなかなか、広がっていないという感じがします。ですから、いろいろなデジタル教材を取り出して、資料を作るとか、実験などの資料を取り出して、それに基づき実験したり、本を読んだり、成果をまとめてパワーポイントで発表したりするというような実践や、また、校務システムでICTを使ってみたら時間のロスや先生の労働が減って、子どもたちと向き合う時間がどれだけできたかというような、先進国で見られるような実践が、日本の現場に合わせて報告されてくればということが、私が受けた印象でございました。どうもありがとうございました。



受賞された先生方、おめでとうございます。私のほうもICTの活用という点で審査させていただきましたが、今子どもを指導するのが、なかなか難しい時代ではないかと感じております。私も、私立の大学で教えていてつくづく思

うことは、学生が90分もたない。90分の授業をするのは並大抵ではないということをしみじみ感じています。だいたい集中するのは15分。45分までは何とかできるけれども、それ以降どうするのだと。大学教員は相当な努力をしているということをお伝えしたいと思ったのです。

どうやって大学生にいい教育をしていくかという教育方法を研究しなければ、90分をもたせることは、いかに苦しいかということを実感したとき、それは大変な研究ではないだろうかと思っております。いろいろな方法があるかもしれませんが、私は実際にメディアというものを研究・実践しております。毎回、宿題をやらせ、毎回、レポートを出す。それを、ITを使って電子メールで添付ファイルで送りなさいと言うと、そのうち半分はほとんど携帯で送ってきます。携帯で400字打てるのかというと、彼らは打てるのです。

というように、いろいろな道具を使っているということはわかったけれども、しかし、少なくとも使い方があって思っております。私が思うに、メディアの活用はある意味、紙との闘いであったと思うのです。しかし、これからは電子メディア、あるいは電子メール、スライド、パワーポイント、さらに映像メディア、あらゆるものを駆使しないと、とてもやっていけないだろうということです。

そういう中で苦心しながら、ここはうまくいった、ここはうまくいかなかったというものを私自身も記録しているのです。その記録が私にとって、ある面で宝です。ただ、これが法則化できるかという、法則にはならないのではないかと考えています。というのは、状況依存です。ほとんどのものが授業の中で、午前に行った授業と午後でやった授業とは違うし、専攻が違えばまた違うというように依存していく部分があるのです。だから、たえずメディアの活用も含めて、道具の活用はいかにあるべきかを研究・実践して、やっていかざるを得ないのです。

そういう研究には、デザインベース・アプロ

チというような方法があります。また、デザインベース・リサーチがあります。我々が欲しいのはfindingではないのです。科学の法則が欲しいわけではない。私にとって、どうやったら効果があるかということが欲しいのです。

教育にとって重要なことはデザインです。デザインベース・リサーチなのだという考え方が、アメリカでも非常にはやってきました。それは実践を通して我々が検証しながら、これはよかった、これはよくなかった、これはなぜよかったのかということを、エビデンスを用いながら伝えていく。メディアはどういう場合に有効であるかということ、それぞれの状況に応じて蓄積していった、それを共有化していくことが大切なのではないか、科学の法則のようにはならないだろうと思います。

そういう点で河角先生の実践は、こういう場面でこのような使い方が効果的だったということが、私たちの心に伝わるように書かれていたということで、優秀賞の受賞になったと思っています。おめでとうございます。



審査委員の講評・所感

秋田喜代美先生

このたび、東書教育賞を受賞された先生方、ならびに関係の皆様、本当におめでとうございます。私自身もこうして一つずつ、事例を共有させていただくことの喜びを感じて読ませていただきました。全体を読ませていただい

て、特に賞を受賞された先生方の論文は、独自の先生の工夫、学校の工夫という質と卓越性の時代の中で三つの特徴があると思いました。

三つの「り」点と呼んでいます、「深まり」、「つながり」、「やり取り」の三つです。この三つが実践記録の中にきちんと書かれていました。「深まり」として、特定の単元や特定の活動、学校における特定の活動を中心にしながら深めていくところに、結果だけではなく、どのようにアプローチして深めていったのかということが、きちんと書かれていました。

そして二つ目は「つながり」です。やはり特定の単元の内容が今回、最優秀賞の岩月佐江子先生の防災教育であれば、地域密着の教材が開発され、また中学校の石原貴志先生であれば、天体模型を使いながら、おそらく理科だけではなく、子どもたちが空を見上げたときに、大人になっても思い出さだろうというような生活とのつながり、長期的なつながり、そして家庭とのつながりというようなつながりを保証できるということが、実践記録から読み取れました。

そして、私は三つの中でも大事だと思っているのは、「やり取り」を通して教師が教えたつもりになった記録ではなく、確かに子どもの側からの声だったり、実証だったり、生徒の学びの姿が見えてくるものであったりというのが確かにあったと思います。岩月先生の実践であれば、児童Aの姿という特定の子どもの深まりを追い、中学校の石原先生の実践であれば、6割が最初事前に分かっていなかった単元が確かに身についたということが子どもの声から出されているというような、やり取りを通してどう変わったかという、形成的な側面から子どもの声が出ている。こういった「深まり」、「つながり」、「やり取り」という三つの「り」がきちんと一つの中に描き込まれていることが、私が審査員としてたいへん感銘を受けたところです。

教師の学びというのは、医者が症例から学び、弁護士が判例から学ぶように、教師は実践事例

から学び合うということが、学校の質の向上においてきわめて重要なことでございます。その意味で、今回それぞれの賞を受賞された実践は、まさに学級文化、学校文化を伝承していく、一つの中核になるものではないかと思います。

それはcorporate identity、Education & Cultureと出ていますが、まさに教育と文化を創っていくといった事例だったと思いながら、本当に私も審査に参加させていただいたことで多くを学ばせていただき、また学校と学校、先生と先生をつなぐときにも、こうした事例を紹介させていただきたいと思いながら読ませていただきました。本当にこのたびは、おめでとうございます。

審査委員の講評・所感

小野具彦先生



受賞された先生方、まことにありがとうございます。心からお祝いを申し上げます。新しい教育課程の移行期にあたってさまざまな課題がある中で、先生方におかれましては意欲的な取り組みをなされ、多大な成果を上げていらっしゃることに敬意を表したいと思います。私は中学校を中心に、感想を述べさせていただきたいと思います。

中学校最優秀賞の石原貴志先生は、創意工夫した自作模型の活用により、生徒にとって理解しがたい天体の運行を分かりやすく理解させていらっしゃると思います。私も理科の教師でし

たが、1970年代の中学校理科教育においては、自作教材に非常によく取り組まれており、先生方同士がお互いに知恵を絞って、どうしたら子どもたちを楽しませることができるかということで腐心していた時代でした。

今は、例えば天体の学習では、コンピュータのシミュレーションによる学習等で済ませがちな傾向が非常に強いと、私はとらえています。かつては、例えば部屋を暗くし、星座を各壁面にめぐらせ、大きな裸電球を真ん中に置いて、私たちを地球と見立てて、テニスボールやバレーボールを持って移動しながら天体の運行を学習したというような、ダイナミックな指導も行われていた時代がありました。

それを思いますと、自作教材を準備されるということだけでも、高く評価ができると私は思います。

優秀賞の上原昭三先生は、身近な折り紙を通して数学を楽しく学ぶという視点で、これも多くの方面で活用していただきたいという思いがしました。私も課題に挑戦する気持ちをもって頭を使わせていただきました。しかし、数学の活用力を高めるとは言いがたい面も多少抱きました。

また、迫田豊先生は強力なリーダーシップを発揮することにより、全職員が一体となり、荒れた学校を見事に建て直されました。優れた学校経営に敬意を表したいと思います。学校はいつでも開かれているべきで、ありのままを見せるべきだと私はいつも思ってきました。先生のおっしゃる「いつでも参観日」には共感いたします。

特別賞の木村好江先生は、優れた実践により生徒に生きる力を育てられました。全国的に見れば小規模校の数のほうが多いわけです。したがって、この実践が多くの学校で参考にされることを望みたいと思います。また、小規模校の特性を生かして1・2・3年合同による実践も可能ではないかと、読みながら考えさせていただきました。

皆様のさらなる充実と発展を祈念して、終わりにいたします。ありがとうございました。



受賞者の先生方、おめでとうございました。私は専門の数学教育の立場から少しお話をさせていただきます。

応募のあった論文は、総合学習、学校教育、全教科という内容が多かったようです。なぜ総合や学校経営のほうが人気があるのかと考えると、その先生方のテーマには、人間とはどう生きるべきか、教育とはどうあるべきか、教育と人間形成はどんな関係があるかという視点がありますから、学校がうまくいけばいい、点が取ればいいということではなく、この子どもたちにどんな教育をしたらいいのか、子どもたちが生きていく上で役に立つものが与えられるかという、そこには「人間」というものが存在しているからだと思います。

ところが、教科教育の場合は、どちらかというと、それがなくなっているのではないかな。例えば、小数の勉強をしましょうということで、先生は「1より小さい、1を1/10等分したものを0.1と言います。点は小数点と言います。2.3というのは1が2と、0.1が三つあります」という。このように解説されて「では5.6はどうですか。Aさん、どうですか。」という授業が行われています。そこには人間が何もないので

す。小数という教えられるべきものがあるって、それを解説して、それがわかればいい、できればいいという教育です。多くの人は、そう考えていると思うのです。

しかし、そうではなく私が子どもに聞いてほしいと思いますのは、「1より小さい数や量の表し方はどうしたらいいかな。」「1より小さな数・量を表すのに小数がなければいけないのでしょうか。」「今まで小数を習わなくてもリットルの次にはデシリットルがあった、ミリリットルがあった、メートルの下にセンチがあり、ミリがありました。」ということはどういうことかということ、今まで人間は1より小さなものがあったら、単位を作ってその小さいものを表していたということです。小数がなくてもいいのです。あるいは日本なら、例えば野球などでわかるように、分、厘、毛、糸と名前をつけていって、小数点を使わなくても1より小さい数を表していました。だから、1より小さい数をもっともっと表したいなら、単位をたくさん作って表せばいい。これが日本の和算の中でやってきたことでした。小数点を使わなくても、1より小さい数を表すことができていたわけで、「こういう表し方があるのだけれども、今までの単位を使って表すのと、小数点を使うのとでは、どこがよくて、どこが足りないのかな」ということのほうを考えさせてほしかったと思うのです。

これは学習指導要領もいけないわけですが、3年生は小数第1位とっているのですが、では小数があれば、すべて小数でいいかといえば、世の中には、小数を使わずにミクロンがあり、ナノがあり、もっと小さいのが欲しいならば、また単位を創るわけです。ということは、小数があればいいということではなく、小数については限界があるということです。どれもみんな人間が創ったものなのです。数学は人間が創ったもので、人間の欲求があっていろいろな知恵を出して、いろいろな作り方をしていって、その中に便利なものがあり、不便なものが出てく

るわけです。それを克服していくのが算数、数学だというような教育が必要だろうと思っています。

ほかの教科でも同様に、「わかればいい」「できればいい」という教育が蔓延しているのではないかという気がしています。そのレベルですと、いい論文は書けません。感動を与える論文はできないだろうと思います。「教える」ということについてはいろいろなレベルがありますが、「人間抜き」のレベルで今学校教育は進んでいるのではないか。そうではなく、もっと教えることについて、人間の知恵を味わって、新しい知恵を出して、人間というものはすばらしいものだという感動を与えられるような授業をしてほしい。また、それに貢献するような教科教育の論文が出てきてほしいということを期待したいと思っています。

審査委員の講評・所感

多湖 輝先生



皆さん、今日は少し別の話をしますが、中小企業というのは、いろいろな業種や資本金によって少し違う定義があるのですが、従業員が300人以下の企業を中小企業とって、301人以上を抱えている企業は、大企業です。

というように定義したときに、大企業といわれているものは全体の企業の何パーセントぐらいあると思いますか。0.3%です。99.7%が実に中小企業と呼ばれている企業なのです。大企業

がどれくらいの人を抱えているかということ、全雇用者の30%が大企業へ行く。つまり、70%は中小零細と称する企業なのです。

そして、利益はどうか。GDPで言うと、半分は大企業が稼いでいる。半分は中小零細というところが稼いでいるということです。ですから、論理的にも大企業の人たちが、いい給料を取るのとは当然だと。30%で50%の利益を上げる。だけど、実際に大企業は小さい中小企業をまた下に抱えている。ですから、親亀がこけると下がこけるというような構造になっているのです。

今、大学は全入時代といわれています。全入ですから、先ほど赤堀先生がおっしゃったようなことが起こっている。私も大学で久しぶりに講義をしてみてびっくりしました。本当に90分もたせるのは至難の業です。

ですから、そういうことを考えると、先生方の論文を拝見していると、あるいは実践の記録を読んでいると、私は千葉大学で附属小学校の校長を5年間やった経験がありますので、義務教育というのは実に立派だと思うのです。先生方の論文も、お世辞を言うわけではないのですが、本当に立派だと思うけれども、そこから上へ行くと、今日本の大学の評価はどんどん世界の中で落ちつつあります。

昨日か一昨日、ロシアが、我が国は少し遅れ過ぎているから一所懸命にやらなければいけないと。大統領が言った言葉は、理科教育の連中をもっとどんどん盛んにしていこうという政策をとるということです。中国などへ行ったら大学生で英語、あるいは日本語を話せる人はそろそろいる。それも実に巧みに外国語を操る。インドはむしろすごいですね。特にIT関係ではインドは非常に進んでいます。彼らは基本的に英語をしゃべっているから、アメリカやイギリスというようなところにどんどん留学して行って、相当にいい成績を取った人が戻ってくる。そういうことで、皆さん、日本の教育全体のレベルをどうやって上げていくかということです。

実際に今、若者のコミュニケーション能力が

よく問題になりますが、では、若者はだめかと言え、バンクーバーの冬季オリンピックは、若者がぞろぞろ行ったじゃないですか。すごいですよ。私はゴルフをやるけれども、石川遼のショットのすごさ、練習の激しさ、しかも、あのインタビューの受け答えのうまさ、実にできている。ああいう若者は一方においてどんどん育っています。しかし、これからの日本は、もっと理系に少し軸足を置いたような全体の構造をとっていかねばいけないと私は認識しています。いろいろな意見があると思いますが、そうでないと、日本は世界の中で生き残っていけないのではないかと、私は非常に危惧しております。

今政局が替わったことによって、教育そのものの基本方針が変わるのか変わらないのかよくわかりませんが、幼稚園と保育園を一体にするなど、もう何十年も前から言われていて、まだそれすらできない。今の日本のこのスローテンポで行けば、日本は世界の中で置いていかれると思わなければいけない。私はそういう危機感をたいへんもっているんで、先生方もどんどんいろいろな意見、むしろ教育行政全体に対する意見もおっしゃるようなディスカッションの機会をぜひもって、いろいろな発言をしていただきたいと思います。授業のやり方もたいへんすばらしいものを研究されていますが、それと同時に、やはり教育行政をどうするのか、日本の将来をどう描いて、どういう人材を創っていくことを我々は目指していくのか、を考えていただきたいと思います。

今、家庭教育の低下が言われますが、無理はないです。お母さん、お父さんが働きに行っているのですから。子どもは一人で食事をしているのです。こんな状態でコミュニケーションのいちばんの基本的なものがだんだん欠けてきていて、いろいろな意味で日本は危機的な状況に来ているのかもしれないと思っています。

審査委員の講評・所感



東原義訓先生

私は、坂元先生と赤堀先生と一緒にICT関係の論文を読ませていただきました。その方面から一言、お話しさせていただきます。

まず、ICT活用は最近目立たなくなっています。新しい学習指導要領でも、すべての教科の中でICTを活用した指導をしましょうということが書かれるようになって、つまり、当たり前になったということから目立たなくなっている。東書教育賞につきましても、昨年度まではICTに関係する部門が独立していましたが、今年から一緒になりました。これも外から見たら目立たなくなっています。

このこと自体はICTが教育活用において浸透してきたので、いいことだと私は思っております。ところが、事業仕分けにもっとも端的に表現されていたのではないかと思います。学校ICTは7事業すべてが廃止という結論になりました。文部科学省は、ホームページでそれに対する意見を求めたのです。

そうしたところ、ご存じのように、科学者からはものすごく大勢の方から、この事業仕分けの結果は納得できないという意見が寄せられたわけです。それに対して、教員もずいぶん大勢いらっしゃるかと思うのですが、ICT廃止に、賛成も含め反対等の意見をおっしゃった方はたった260件。片方で何十万件の科学者が表明しているのに対して、ICTに関しては全国の先生方と教育委員会の方を合わせて、たった260

件。ICTと英語ノートは同じセッションで事業仕分けをされたのですが、そのときに英語ノートについては約2000件が、継続してほしいという意見がありました。ICTが目立たなくなったことはいいことかと思ったのですが、実際には、どうもそうではなかったようです。

そんなときに河角先生が示してくださった実践は、とてもシンプルで効果がある。どの先生でも、どんな先生でも、ご自分はICTが苦手だとお考えになっている方でも、ちょっと教えていただければ、まねができる。アイデアと継続性の努力が必要ですが、そういうものを示してくださいました。しかも、データを付けて、子どもたちに成果が本当に上がっているのだということを示してくださいました。

ICTが本当の意味で当たり前になりますように、どうぞ東書教育賞でも多くの方がICTのところにチェックを付けて応募いただきたいと思っています。特に外国語活動ではとても役に立つと思いますので、ここにお出でくださった、受賞された方々にお祝いを申し上げますとともに、皆様方の責任と思って、お帰りになったら地域にぜひ広めていただきたいと思います。

審査委員の講評・所感

三上裕三先生

このたび受賞された先生方、まことにおめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。私は小学校部門を中心に感想を述べさせていた

できます。

まず、最優秀賞を受賞された愛知県安城市立志貴小学校の岩月佐江子先生、このたびはおめでとうございます。先生は「過去の三河地震の教訓から防災を学ぶ地域密着の総合的な学習」というテーマで、6年生を対象に実践されたものです。災害は忘れたころにやってくると言われていますが、阪神大震災から15年経過し、またつい最近、カリブ海のハイチでたいへん大きな被害がございました。

三河地震は終戦の年、昭和20年1月に発生したと言われています。当時、戦時下にあって広く国民一般に知らせることを控えたようですが、当然、今の子どもたちは知りません。また、実際に三河地震を経験された方もたいへん高齢になっています。六十数年前に地元で起きた地震の教訓を生かし、防災に対する子どもの意識を高めることをねらいとして実践されています。

学習の動機付け、計画、実践が子どもの実態に即して計画されていて、子どもの変容の様子が実によくわかります。また、学習の成果が報道等を通して広く地域社会に伝達された意義も大きいものと思います。他校においても、防災教育の一環として大いに参考となる優れた論文であると思います。

次に優秀賞は、熊本県玉名市立有明中学校の井上裕一先生、福島県石川町立南山形小学校の塩田正信校長先生のお二人と、ICTにかかわる論文の埼玉県所沢市立北秋津小学校、河角哲也先生です。

井上先生は2年連続の優秀賞の受賞です。おめでとうございます。現在は中学校にご勤務されていますが、昨年度まで勤務されていた熊本大学附属小学校での実践をまとめられたものです。先生は「追究意欲を高める社会科教材の開発と学習活動の工夫」と題して、5年生での社会科の実践研究を行われました。

問題意識を高める教材の開発、そして児童相互の交流を促す学習活動の工夫を目指した研究

実践です。漁業関係者から聞き取りをしたり、あるいは定置網漁の実体験等を子どもたちに体験させたりしています。そして、その体験を通して、子どもの、「なぜだろう」「こうなるはずなのに」といった問題意識を高める教材の開発をされました。また、課題意識をもって主体的に課題を追究する子どもの姿と、その変容の様子がよくわかる論文です。これからも地域に密着した教材の開発や、表現力を高める社会科授業の改善等の研究に取り組まれ、次回は中学校での実践を期待しております。

次に、塩田校長先生は僻地小規模校の子どもが抱える実態を踏まえ、学校経営の立場から徳・知・体のバランスの取れた子どもの育成を目指し、学校・保護者・地域が一体となって取り組まれたものです。

具体的な実践として、「3 H30 S」という実践目標を掲げ、すべての教育活動を通して教育目標の具現に努められました。39名の児童がそれぞれ目標を持ち、自己評価を続けながら、確かな変容を遂げる様子がわかります。また、保護者の学校に対する評価も高いものがあり、研究を通して学校の教職員の結束力が強まったこと、自己啓発の意識が高まったことが校長先生として大きな収穫だったと感じられているのではないのでしょうか。今後、本実践が学校の風土として根づくことを期待しております。

特別賞は、知的障害児を対象にした英語活動の実践をまとめられた、小林省三校長先生です。特別支援学級における英語活動の実践は、まさに新しい発想によるもので、校長・担任の指導協力体制が実に素晴らしいと思います。これを一般化され、他校の実践に生かせるよう、さらに研究実践を深めていただきたいと思います。

本日は出席されていませんが、奨励賞の浪越一浩先生、釜親美和子先生、秋山麗子先生、以上3名の先生方にもお祝いを申し上げて、今後のご活躍を期待し、感想とさせていただきます。本日はおめでとうございました。